

第3回北九州市基本計画見直し検討委員会 議事概要

日 時 平成 25 年 5 月 10 日(金) 10 時 00 分～12 時 00 分

場 所 ホテルクラウンパレス小倉 2 階 香梅の間

出席委員

伊藤 直子 (西南女学院大学教授)
太田 康子 (北九州市婦人会連絡協議会事務局長)
岡田 知子 (西日本工業大学教授)
古城 和子 (九州女子大学教授)
近藤 倫明 (北九州市立大学学長)
谷 美紀 (NPO法人 子育て・シンク・タンク理事長)
成田 博澄 (福岡県警察北九州市警察部長)
羽田野 隆士 (北九州商工会議所専務理事)
比山 穰 (公募委員)
細川 文枝 (公募委員)
吉塚 和治 (北九州市立大学教授)

(敬称略・50音順)

1 開会

－委員長挨拶－

2 議事

(1) 「元気発進！北九州」プランの体系イメージについて

－「資料3」に基づいて事務局より説明－

(2) プランの進捗状況(4年間の成果と課題等)の説明について

－「資料4-1」、「資料4-2」、「資料4-3」、「資料5」、「資料6」に基づき事務局より説明－

(3) 討議内容(主な委員意見)

①「Ⅲ-1 快適に暮らせる身近な生活空間づくり」について

岡田委員

- 斜面地の住宅地の空き家が増加している。若い世代の居住者の定住促進を図るためにも、建築行為、増改築、建替え等を促進するような施策を考え、住み継ぐ仕組みづくりと、斜面地に住むということの新たな価値の創造をイメージ戦略として打っていく必要があるのではないかと。
- 空き家を持っている所有者とそれを借りる、または購入する次の住み手への橋渡しのような仕組みづくりも重要なのではないかと。

成田委員

- 迷惑防止活動とは、基本的な道徳・マナーをアップしようと、策定されたと理解している。よって、行政側が主体的に動くということではなく、必要性があれば「この場所は路上喫煙が多い」などの地域住民の声を聞き、行政が重点推進地区等に指定してもいいのではないかと。

②「Ⅲ-2 生活に根づき、誇れる文化・スポーツの振興」について

谷委員

- 北九州の文化施設は、自然史歴史博物館をはじめ、素晴らしいものがあると思うが、最近では、展示や夏休み等の特別展で子どもの視点を持った催事が少なくなっており、子どもにとっては敷居が高くなっていると感じる。どの世代を対象にした展示内容にするのか等、メリハリを付けたものにする必要があるのではないかと。

古城副委員長

- 市の施設は、オープン当初は良く利用されるが、その後は入館者数が減っていく。これは、本質的な問題があると思う。施設の入館者が少ないということは、事業目標に対する不達成であるため、きちんと分析した上で、広報や関係団体との連携等も考えられるが、やめるべきはやめるのも一考であるとする。
- スポーツの分野においても、最近では民間の施設が多々ある。そういう所に行っていたことで、民間の実需を吸収し、雇用促進にもつながる。市は最低の部分を行うとか、明確なポリシーを作る必要があるのではないかと。

太田委員

- 健康器具や子どもの遊具等が設置されるなど、公園が再整備され、公園には親子連れが少し姿を見せるようになった。このような、公園が再整備されたといったような情報をもっと発信する必要があると思う。

比山委員

- スポーツは余暇活動のひとつであるため、スポーツ実施率にこだわることなく、誰もがやりたいと思ったときにやれる環境づくりの視点が重要と考える。

③「Ⅲ-3 活発な市民活動を促進する環境づくり」について

太田委員

- 婦人会活動を行っている立場から、市民活動の持続のためには、行政からの支援等をあまりあてにせず、自立して活動していく必要があると考える。

比山委員

- 財政難の折、全ての施策に対して全ていいような施策をすると切りがたい。優先順位も踏まえた議論も必要だと考える。
- 「個人情報保護法」の施行後、市民の反応が敏感になりすぎているのではないかと。そのため、行政側も敏感にならざるを得ない状況になっている。この点について市民も含めて、どう考えるのか議論する必要があるのではないかと。

古城副委員長

- 市民が主体となった仕組みづくりのためにも、市はあくまでも市民に対しての支援を行う中で、選択と集中を実施し、民間に任せるものは任せ、地域住民に対しても役割分担をもってもらいたい視点での議論も必要であるとする。

羽田野委員

- 先般、行財政改革の議論がされている。このような動きも本計画の見直しにあたり、取り入れる必要があると考える。

④「Ⅳ-1 高付加価値産業の創出」について

羽田野委員

- 北九州で企業が継続的に事業ができるよう、北九州としてどのようなインセンティブがあるのかが、非常に重要であるとする。
- 「新成長戦略」の考え方も、本計画の見直しに盛り込むべきとする。

吉塚委員

- 海外進出の際、進出先の国の状況が分からず、進出に二の足を踏んでいる企業があるため、進出先の国の状況を説明できる、コーディネーターやブリッジ人材の育成が必要であるとする。
- 経済ミッションの受け入れや、経済ミッションの派遣等を行い、北九州市の産業技術力を知ってもらうことが重要であるとする。

⑤「Ⅳ-2 商業・サービス産業・農林水産業の振興」について

岡田委員

- 都心部の空き地や駐車場を、都心のにぎわいに寄与するような活用をすると、税制面での優遇、建築面で容積率にボーナスを与えるなど、何かインセンティブを与えるなどの施策を積極的に行う必要があると考える。
- 環境首都北九州市として、古い老朽化したビルなどを有効に活用していく（リノベーション）という形で活用するという方向性も必要であると考えます。

吉塚委員

- 今までの固定観念的な「商店街」のイメージを打破するような、新たなベンチャー的な発想で商店街を活性化していく必要があると考える。

比山委員

- 商店街は、駅前や交通の利便性が良い所にあるので、そのメリットを最大限に活かす必要があると考える。

谷委員

- 商店街内の店舗が閉まる時間が早く、若者が街に近寄らない大きな原因になっているのではないかと考える。

⑥「Ⅳ-3 多様なニーズに対応した人材育成と就業支援の推進」について

細川委員

- 「女性の活躍できる場」を考えた際、仕事には、女性、男性の得意とする部分がある。本当の意味での男女平等を加味できれば、女性の働く場は広がり、また女性の観点でものを見たときの見方も変わっていくと考える。

伊藤委員

- 北九州市は政令指定都市の中で高齢者率が最も高い。そのため、高齢者介護等に従事している人も多いのではないかと考える。そこで、介護イノベーションというか、介護ビジネスとものづくりを結び付けた、日本全体へ発進できる何かプロジェクトを作っても良いのではないかと考える。その際、女性や中高年者の力とものづくり事業者である小規模事業体を結びつけて、何か創造できないかと考えている。要は、少子高齢化を前向きに捉え、北九州のビジネスの新しい形として提案できるようなビジネスとリンクさせた取り組みが必要ではないかと考える。

谷委員

- 女性のキャリアアップ・キャリア形成を図るため、就業支援をしていくことで、女性の雇用促進にもつながっていくが、女性の再就職の際、気兼ねせずに十分仕事に力を発揮できるよう、企業共同託児所といったような施設づくりについても、考える必要がある。

太田委員

- 豊かな発想と実行力を持った人材育成が必要であり、女性が元気でもっともっと挑戦できる都市でありたいと考える。

⑦「IV-4 にぎわいづくりの推進」について

古城副委員長

- 視覚的に「北九州は灰色の感じ」と言われる。このように言われたい仕組みづくりを考える必要がある。その際、一つの方向性をもったシンボル、ビジュアルな部分でも、ロゴでも構わないので、そういったものが必要ではないかと考える。
- 市をどういう形でイメージするかは、非常に重要である。本市には良いものがたくさんあるが、見せ方がへたなように感じる。企業誘致にしても、観光誘致にしても、イメージが大切である。にぎわいづくりの推進においても、海外の人などにも訴えられるようなものを、専門家の力も交えたあか抜けた方向でのイメージアップを考えていただきたい。

羽田野委員

- 北九州の売りのひとつは環境である。環境で北九州の企業が潤い、いかにすれば北九州で環境ビジネスに花が咲くかを、今後の目標として考えていく必要がある。北九州の企業が、活性化するチャンスは、アジアをにらんだ環境にあると考える。もう1つの売りは観光である。産業観光に花を咲かせるため、コンベンション協会や、観光協会、商工会議所などと、コンソーシアムを組んで連携しながら、業界の方々を北九州市に呼び込み、1泊していただき、北九州の産業観光を見てもらうのが良いのではないかと考える。
- 人口目標 100 万人は、産業面から見ると必要ではないかと考える。例えば町村合併も含めた、広い視点で考える必要がある。

岡田委員

- 北九州市のイメージアップにつながるプロモーションも必要ではあるが、市民自身が自分が住んでいる所がいかに素晴らしいかということ、もう一度見直すことが大事である。自分の住んでいる環境が、どんなに価値のあるものか気付いていない方も多いので、足元を見直すような取り組みを行い、今あるものを見つめ直し、そこから価値を見出すことも必要であると考えます。

以 上